IMAJ ニューズ

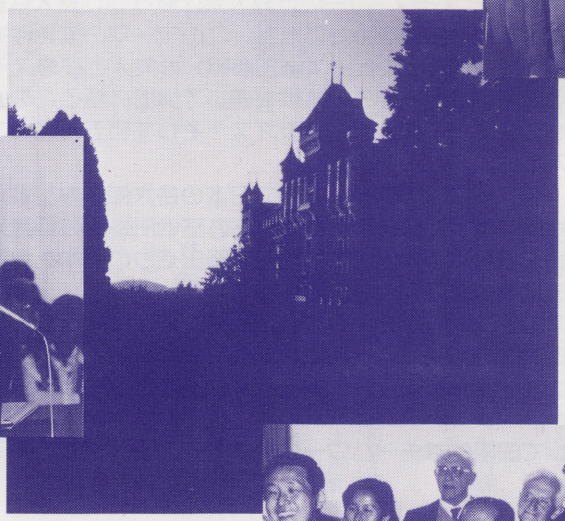
国際MRA日本協会機関誌

NO.30

発行年月日　昭和57年12月18日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL.03－821－3737(代)

INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN　〒113・東京都文京区千駄木4－13－4

Urgent — CAUX 1982
moral and spiritual development



■コウで感じたこと 考えたこと　木内信胤　2P
■韓国MRA青年会議　ジェフリー・クレイグ　11P
■人と機構⑥　イエンツ・ウィルヘルムセン　12P
■あの時この人　その2インドからスイスへ　15P
■「十河氏さんを偲ぶ会」開かれる　16P

いまこそ道義と精神の開発を　コー会議レポート

「道義と精神の開発」は、古今東西を問わず時代の転換期には必ずといっていいほど謳われてきたことである。その時代に生きた人々は、これこそが最も急を要する課題と考えその対策を練った。

ローマの野蛮性をけなしたギリシャは自らの退廃によって崩れ、フランス文化の未熟さを嘲笑したそのローマも道義の乱れからかつての栄光をとどめることはできなかった。

ＥＣ全体の失業者が千二百万に達し、アメリカのそれも十パーセントを超えた。離婚、少年犯罪、都市暴動の激増する中を反核運動が駆け抜けた。昨年から今年にかけてアメリカ・ソ連・フランス・西ドイツ・オランダ・イタリア・ノルウェー・スウェーデン・デンマーク・ギリシャ・スペインで新しい政権が誕生した。

〝行き詰まり〟を露呈しているのは何も「西欧文明」ばかりではない。共産圏に共通する〝破産状態〟はますます進展している。この夏アフリカ統一機構会議と非同盟諸国会議が相次いで延期を余儀なくされたことは、第三世界における混乱ぶりを示している。

ただ単に文明の軸が一つの地域から他の地域へ移行しつつあるのではなく、道義の地盤沈下が各地域で同時進行している。

「いまこそ道義と精神の開発を」とスイス・コーの世界大会に駆けつけた人は約七十ケ国三千名あまり。多くの紛争地域の人々の参加が例年より多数をみたことも、このテーマの緊急性をものがたっている。

カンボジアのソン・サン首相（ＩＭＡＪニュース№29参照）は夫人と子息スーベールを伴っての参加。一国の自由と統一の代償がいかに高いかと、自らの体験を通して謙虚に語るこの仏教徒のアピールには、レバノン・アルゼンチン・アフガニスタン・ベトナム・ラオス・そして百五十名あまりのアフリカの人々などが身につまされるように聞き入った。

アメリカ・ナイジェリア・タンザニア・タイ・そして日本の各大使も参加者に混じって積極的な発言をした。外務大臣派遣の岡田晃大使は、かつて自ら所長を務めた外務省研修所の雰囲気やセルフサービスの精神がコーと共通していることを紹介されたほか、日本が明治以降国造りの基本を教育など人造りにおいたことなどを述べて途上国からの参加者を中心に大きな感銘を与えた。

アメリカとヨーロッパ・アルゼンチンとイギリス・カンボジアとベトナム・南アフリカと黒人アフリカなど最も急を要する、コーならではの対話が二ケ月にわたって培われた。こうした組み合わせの場合、ニュースメディアに取り扱われるのは普通対立面だけであるが、コーにおいてはこうした組み合わせ同士の和解と融和づくりに努力が注がれた。

道義と精神の開発をめざして国際的なチームワークの中で一人一人が今こそ取り組んでいかなければならない瀬戸際にきている。

コウで感じたこと考えたこと

木内信胤

一

驚いたのは、その建物の大きいことでした。私は過去五年、日本で行われた「産業人会議」には出て来ました。濠州で行われた会議にも出ましたが、コウの本部に行ったのは初めてでした。「産業人会議」に正式のメンバーとして集った人は一七〇名ほどと聞きましたが、何やかんや四百名ほどの人がおられたのだそうですが、あの家には、スッポリと入ってしまい、まだ余裕あり、という感じでした。

その家は、〝マウンテン・ハウス〟と呼ばれるのだそうですが、レマン湖の水面からみても七〇〇メートルぐらい高い。その上、急斜面のなかのわずかな平地に建っているのですから、この名はまことに相応しい。景色もいいし、スイス中のスイス、といっていい、と思いました。

組織らしい組織が殆どないの

がMRAだそうですが、それでいて万事極めてスムーズに動いて行く。これは驚いたというよりは感心したというべきですが、スムーズであると同時に静か。それが印象的でした。

ほんとに驚いたことが、もうひとつありました。それは、オランダのフィリップスさん、英国のクーパーさん、スイスのカラーさんという、御年輩でもあるしMRAでは大御所中の大御所というべき方々が、最後の晩餐会で披露された〝芸のうまさ〟でした。長くなるからその内容は申しませんが、フィリップスさんは、即席の戯画、カラーさんはヨーデル、クーパーさんは手品、いずれも大したものなので、本当にびっくりしました。

二

これも驚いたことのひとつ。自分でいうのはおかしいようですが、それは私のスピーチに対する〝反響のよさ〟でした。

MRAの方はひとの話を、実に素直に聞いて下さる。だから〝通りが実にいい〟ということは、いままでの「産業人会議」でも経験したことでしたが、今度は全くの驚き、かつ喜びでした。

私の論題は、〝近代工業は人間のよき性質を発展させるか〟というのでした。これは頂戴した論題で、私としてあまり話したい題目ではなかったのですが、

〝世界の二大工業国であるアメリカと日本とは、いま経済摩擦を起している。その慶理がうまく行かないと、日米の間はケンカになるが、そうなるようでは、「人間のよき性質」を発展させるどころではない、全世界を大変なことにしてしまう〟

という目下の我々の最大の関心事を捉えて、その「慶理方法」を話した。

内容をここに書くわけには行きませんが、

〝日本がすでにアメリカ向きにやっている工業製品輸出の「自主規制」は、ひとの国を苦しめてまで日本は輸出をしなくてもいい。という道義的な心情からやっていることである。但し、日本人は、それをそうとは自覚していない。しかし、この日本人がいまのところは無自覚にやっていることを、全世界・貿易上で優位に立つ国はみなやるべきだ。だから、アメリカがいまその農産物をもっと日本に輸出したい気持ちはわかるが、それは日本が〝欲しいと思う程度〟に止めておくべきもの。日本がこれ以上は嫌だというのを、「ガットの自由貿易の原則」を持ち出して、日本に輸入を強要するようなことをしてはダメですよ〟

ということを中心に、その背後の「経済哲学」なども語ったのでした。

アメリカがこの私の意見を素直に聞いてくれると、日米関係は本当に〝仲のいいもの〟になるのですが、右の私の主張は、一見しておわかりのように、

〝貿易という経済行為に、「倫理性」を持ち込むこと〟

ですから、MRAの方々が喜んで下さるのは当然といえば当然であったのです。

三

日米の間は、いまケンカになりそうだから、対案として、急いで「倫理性」を持ち出すのではありません。子供を見ていればわかるように、ごく小さい間は、可愛いことは可愛いが、その求めるところは自己中心、エゴのかたまりのようなものです。それが段々眼が開いて来ると、他人様の存在がわかるばかりではない、他人様のために尽して上げることが、そのまま自分の喜びでもある、となって来るのです。ですから、国際関係においても、〝貿易上優位に立つような立等な国〟になるに従って、〝相手の都合も考えながら行動する〟ということになって当り前。これが〝倫理性の持ち込み〟です。

コウというところで、このような話をしたところ、実によくわかってくれた。私はそのことの意味の大きさを、あれこれと考えて、いまもなお喜びにひたっているのですが、なぜMRAで話すと〝通りがいい〟のか。それはみなが相手もまた〝正直〟〝純潔〟〝無私〟、そして〝愛〟の場に立っていることを、前提として疑っていないからでしょう。（世界経済調査会理事長）

御案内

国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連繋のもと諸般の活動を行っております。毎年開催される国際MRA会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の『心の開国』を推し進めるために活動しております。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせて頂きます。

一、会　費

個人特別（月額）一万円
個人（年額）五千円
法人（年額）五万円

一、払込先（いずれも普通預金）

① 住友銀行新宿西口支店
二五九—四一八三七九

② 第一勧業銀行代々木支店
一六三—一〇一四三三六

③ 富士銀行動坂支店
二三六—八六一二二〇

④ 三井銀行池袋支店
一八一—四一九八九九八

⑤ 三菱銀行池袋東口支店
一七三—四四五六九〇〇

国際MRA日本協会宛

MRAを訪ねて

西村光夫

共通の信条を必要とする現代社会

MRAは、発足は一九二〇年代というから半世紀以上の歴史をもつ運動といえる。明らかに第一次大戦後の混乱から世界を建直すに当って、創設者ブックマンが一つの信念をもって打出した精神運動である。日本には第二次大戦後になって根づいてきた。私は、戦後きりもなく厄介な問題の継起する情勢に対して、「科学技術の面も含めて、その上に立ち、国境を越えて人人がその権威を認め共通の信条とするような、新しい宗教とも言えるものが樹立されるまでは、世の中は本当には治まらないだろう」というようなことを言った。実際漠然とではあるが、そんな気がしたのである。

近世のはじめに至るまで、どこでも宗教は人々の心の奥底を握り、その人々の織りなす政治や社会のありかたに決定的な影響力をもった。その力が近代、特に現代に及んで急速に衰えたのは、いうまでもなく西洋に興った科学技術の発達の影響といえる。この合理主義に基づく科学技術が人間の労力を省き、生活を豊かにする功績を挙げたことは疑う余地がない。爾来科学技術の利用促進による経済発展が人間社会発展の鍵と認められるようになったのも道理である。しかしこの傾向は最近に至って、種々の壁にぶつかることになり、各方面に反省の声があがるようになった。いうまでもなく物質面への偏向が、精神面での空洞化ないし荒廃をもたらしたからである。科学技術は専門化し、専門化はその結果を顧慮せず前進する。新兵器のとめどない発達などその例であろう。この専門化による発達はコントロールがきかない。そこで人々が何か人間の活動が間違った方向にゆかぬよう、コントロールの力が働かなければならないと考えるようになったことも当然と言えるであろう。

ところが実際問題としては、科学技術に基づく産業発展の魅力は大きく、どんどん伸び進むのに対して、次々に出てくる困難な問題に対しても、これを経済の問題として捉え、解決してゆこうとする志向が強い。これは目前の問題としては確かに道理があるのだが、一方の反省からくるコントロールの力の方に確とした伸びが見えない。もちろん宗教家や道徳家の叫びは各所にあり、それに同調する人々の数も少いとはいえないが、天下の大勢からすればなお微弱なものといわざるを得ない。こうしたなかにあって、私が去年とこんど訪ねたMRAという組織の運動は異色があり、注目されていい運動の一つであると言えそうである。

この運動はブックマンという人によって一九二〇年代に始められたというから、すでに半世紀以上の歴史をもっている。日本にも小田原に本部をもって活動しだしたのは昭和三十年頃のことで、十河信二氏や石坂泰三、渋沢敬三氏等も賛同して、私もその頃招かれて集会に行ったことがある。しかしその頃は専ら若い人達の反共的な劇などが表にでていたようであった。それから長い月日が経って同組織が主宰し、箱根で行われた産業人会議というのに去年から出席して大分様子の違っているのに気付いた。そして八月の終り頃に本部のスイスのコーで開かれた会議に加わり、また今年も顔を出したのである。会議の模様はそこで大いに活躍された木内氏の報告に譲るとして、MRAについての私の感想の一端を述べておくことにする。

良心を実践する

私は専ら前述べたような気持ちからMRAの本質と効果といったものを考えた。私がこの運動に異色があるといったのは、第一にキリスト教に根を置いてはいるが、行き方が従来の教会的なものと全く違い、他の宗教、宗派などに捉われていないこと、人種にも職業にもこだわっていないこと、産業人会議をもつ位であるから、経営者も来ると同時に、組合の指導者も包摂していること等である。そして個人的な触れ合いから、友情を育て、いままでの立場に捉われがちの心を一変して、それを毎日の実生活の中に生かしてゆこうという願望をもって動いている。明らかに一つの精神運動であり、間接的な行き方といえるが、こんにちの分裂し、混迷した世界にあって、それぞれ異った伝統と立場にある人々を結びつけ、無用の争いを軽減してゆこうとするならもっとも賢明な一つの行き方であろうかと思われる。私がもっとも興味を感じたのは接触と会話を通して個々人の良心を喚起し、それを日常の生活や仕事の中で実践に移そうという着眼である。自分の良しとするイデオロギーを強制しようとするところがない。気の短い人にはじれったい行き方かも知れないが、地味な効果は少からざるものがあると思われる。この仕事に献身的に働いている人々に敬意を表するとともに、この運動が一層発展し、いろいろな方面に深く広く浸透して、産業技術的偏向の矯正に更に役立つものに成長して欲しいと願うのである。

（世界経済調査会常務理事）

土光哲夫

MRA産業人会議に参加して

MRAの産業人会議に東芝労使がグループで参加するようになって、今回のグループで六回目になります。私達グループ六名は全員が初参加であり各人若干の不安と緊張はあったものの、既に過去に参加された諸先輩の話しを伺う機会もあり、又東芝の労使間ではMRA精神をベースにした相互信頼の上に立って「誰が正しいかではなく、何が正しいか」というブックマン博士の至言が定着しており、MRA精神の何んであるかについてはある程度理解を持って参加することができました。一方私個人としては現在の日本の社会的風潮に問題意識を持っており、この風潮を直すためには日本人の心を正しく豊にする。言いかえると道徳心の高揚以外にはないのではないか。そのためにはそのバックボーンである躾、教育等を見直す必要があり、個人ではどうにもならない力の限界を感じ、ジレンマに落ち入っていたことでもあり、世界各国でMRA精神をもって活躍している人々と接する機会を与えられたことは一つのチャンスと期待をもって参加させていただきました。

コーデの産業人会議―世界の産業・対立から調和への道を探る―へ参加しての感想は、第一に世界三十四ケ国という多くの国の政府機関・経営者・労働組合役員の代表者が集まって、熱心に講演を聴き、デスカッションをする姿を見て、世界経済に多くの問題がある現在、自国内にだけ目を向けているだけでなく世界中の多くの人々と接し利害を超えて腹蔵なく話しあうことがどれだけ必要であり、大切なことかを知ることができました。

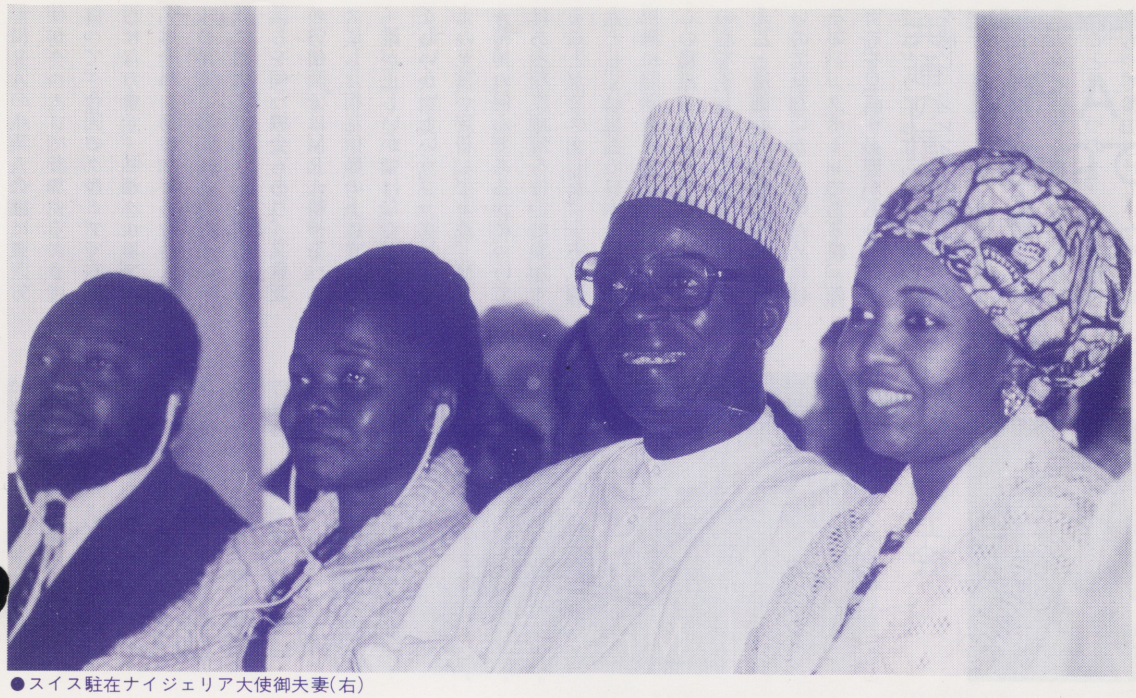
第二は既に日本との接触が多いアメリカは別として、他の国特にイギリス、フランス等が日本に対して大きな関心をもっており、一部の国の方々とは食事をしながらの懇談の時間をもつことができましたが、その時の目の輝き、熱意に圧倒されそうな感じさえし、二時間程度では時間が足りないように思うことさえありました。もっと多くの日本人が参加して、多くの国の人々と話しあい、正しく日本を理解していただくと同時に相手国のことも理解を深める努力が、貿易国である日本にとって重要なことであり絶対に必要なことだと思います。他の国を知るという面ではオーストリアのホフマイヤー氏の講演を聞き、オーストリアが長い歴史的戦いの中から現在は政府・経営・労働の代表者が話しあいをベースにパートナーシップを発揮して決して物的に豊かではないが、ストもない失業率も低い素晴らしい社会を実現していることを知ることができました。

第三に木内信胤先生の日本の貿易に対する今後の姿勢、自由貿易のあり方に対する講演は参加者全員に大きな感銘を与えました。多くの質問が出ましたが、質疑応答を通じてより理解を深めることができたと同時に、日本人の彼等の日頃知りえない一面を見ることができたのではないでしょうか。私はかって東南アジア諸国を見学したことがありますが、その時工業化を進めて行くそれらの国の人々を見て収入が増えTV等を買うことのできるような生活ができるようになるかも知れないがそのことが彼等に本当の幸福をもたらすのか、それ以前に他にやるべきことがあるのではないかと疑問を持ちました。先生の日本のこれからの進むべき方向、第三世界のあり方のお話しを通じて私の疑問にもご解答をいただき大変勉強になりました。

第四は世界中の人々が人類の平和と幸福への道について話しあう場としてこれ以上の場所は絶対にないのではないかとさえ思われる環境のスイス・コーのマウンテンハウス、この地をMRAの会場にされたスイスの人人とMRA関係者の先見性とその実現のために払われた努力、奉仕の精神にただただ頭の下がる思いで山を降りさせていただきました。

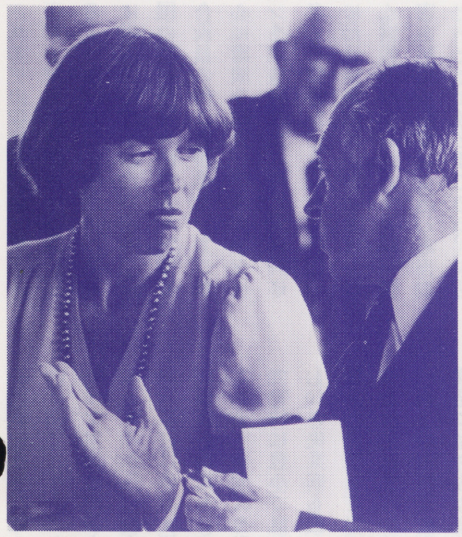
最後になりましたが、我々の滞在中、語学が不得手な我々をなに不自由なく参加させていただきました日本MRA協会の皆様のご協力、ご援助に心から感謝を申し上げます。本当に素晴らしい会議に参加できて幸福でしたありがとうございます。これを機会に微力ながらも身近な一人一人の人達の幸福のために努力をしていきたいと思います。

（東芝府中工場、総務部長）



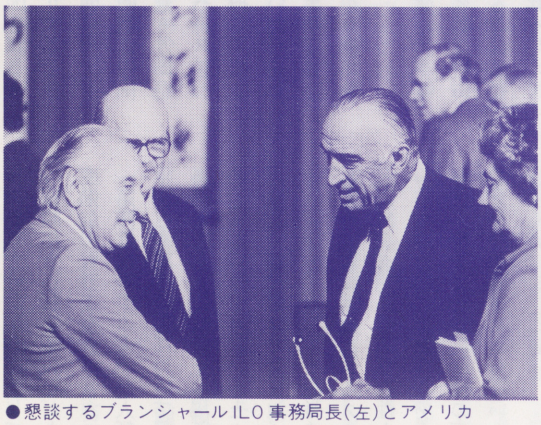
●スイス駐在ナイジェリア大使御夫妻(右)

今年のコー世界大会



●米国務省より参加した駐スイス米大使(女性)

●全体会議でスピーチする岡田日本大使



●懇談するブランシャールILO事務局長(左)とアメリカ中労委議長ヴァン・ダ・ウォーター氏(一人おいて右)

●キッチンでも活躍する東芝のみなさん

数百万のドイツ人に代わってMRAに讃辞を

西独大統領MRA国際代表に語る

九月十三日西ドイツ大統領カルステンスは二十二ヵ国五十七名からなるMRAの国際代表を公邸に迎えた。今後の国際情勢及びMRAの世界的活動を模索すべく十日間に亘ってボン近郊に集っていたこの代表団に対し大統領は、「MRAの果たす働きは、とても具体的なものです。たとえば戦後我々ドイツが国際社会に迎えいれられフランスとの関係を修復できたこともMRAに依るところが非常に多い。今日も皆さんはあらゆる国々に活動を拡げ、真の意味での世界を目ざした国際コミュニティー作りに邁進しておられる」。と述べた。

三十年に亘ってMRAと親交のある大統領は倫理と政治について次のように語った。「人間の自由は失敗や間違いの可能性を常に秘めている。それ故それぞれの世代なりに更に新しい努力を続けていかねばならない。状況がどうであれその世代は現実を理想に近づけるべく努力を怠ってはならない。この点について皆さんから常々ご教示いただくことを感謝したい。

この任務は特に急を要しかつ難儀なものである。世界中で遍く通用する共通の理想が存在しない故難儀なのであり、相互依存時代の今日政策の全てが世界全体への影響を考慮せざるをえない故に急を要するのである。グラッドストンが言ったように道義的に間違っていることが政治的に正しいことはない。

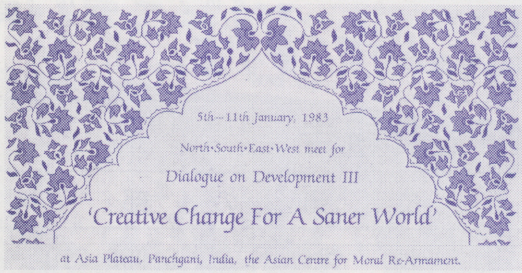
こうしたことは責任ある政治家だけに任されてはいない。世論の支持なくして政治的代表は行動することができないからである。まさにここにMRAの役割がある。」

挨拶のあと大統領はライン川をのぞむ部屋を一巡し、レバノン・アフリカ・南米などの紛争地域の代表などを中心に一同と四十分間なごやかに懇談した。

西ドイツ

海外トピックス

インドMRA国際会議「開発のための話し合いパートIII」



昨年、今年に引き続き来年1月5日より11日にかけて第3回目の〝開発のための話し合い―パートIII〟が、「健全な世界を築くための創造的な改革」のテーマの下、インド・パンチガーニのMRAセンターで開催される。アジア各国は勿論のこと世界中から参加者の集うこの会議の運営を、今回は日本がコーホストとしてインドと共に担うことになっている。

MRA日本協会の高瀬正二新会長夫妻、木内信胤、相馬雪香両副会長等の会議参加が予定されている他、既に数名の日本青年が現地で準備に着手している。

貧困や飢えに苦しむ多くの人々のために開発は進められねばならないが、経済的・技術的開発が正しく機能するためには、それに携わる人の心や発想が重要な決め手となる。開発を阻む大きな要因となる、汚職、不信、憎しみ、不道徳などにどのように対処し、解答を与えるかということに、この会議は焦点を当てる。参加者の体験の相互の交換が、それぞれの状況の中でどうしていくべきかの重要なヒントを与える。

先進諸国の中においても心の荒廃、道義の頽廃が叫ばれる今、世界的な要請ともいえる心の、そして人間の開発という問題に取り組もうというのがこの会議である。また、会議の期間を通して培われる参加者同志の相互信頼と理解が、今後の国際的チームワークを益々助成していくものと期待される。

インド

新会長に高瀬正二氏選ばる　土光前会長は名誉会長に

昭和57年度総会開催　十月九日憲政記念館

去る10月９日、東京永田町の憲政記念館会議室において国際ＭＲＡ日本協会昭和57年度総会が開かれた。柳沢錬造理事長の挨拶に引き続き、昭和56年度事業報告、会計報告、監査報告及び57年度の事業計画が報告され、承認された。席上、定款の一部変更と役員の改選が提案され満場一致で可決された。（別掲）

尚、総会に先がけて行われた理事会において、新会長に推挙された高瀬正二氏の会長就任が満場一致で承認された。これを受けて高瀬新会長より就任の挨拶があり、その決意と確信が述べられた。土光敏夫前会長には後日、名誉会長就任の承諾をいただいた。

続いて第２部としてＭＲＡ世界大会を中心とした報告会に移り、それぞれの体験や決意が披露された。

国際ＭＲＡ日本協会役員

昭和57年12月18日現在

名誉会長：土光敏夫
会長：高瀬正二
副会長：加藤シヅエ　河原亮三郎　木内信胤　杉田一次
理事長：柳沢錬造
理事長代行：尾関雅則
常任理事：兼松正　狩野安　ジェフリー・グレイグ　榊たか子　佐藤魁　瀧真次郎　中嶋勝治　長野清志　二宮秀夫　藤田幸久　本郷富士子　山崎房一
理事：瀧山養　住友義輝　相馬雪香　小柳平三郎　住友美子　徳光憲　中畑婦幹　星みや子　本郷健爾　増田敬作　矢野弘典　山形毅章　和田宗一　イエンツ・ウイルヘルムセン　久保谷恵美子
監事：相馬恵胤　鶴田重蔵
顧問：赤城海助　木村行蔵　久保等　阪本勇　鈴木強　竹本孫一　塚本三郎　戸叶武　畑千鶴子　原文兵衛　三井英子　山田稔

国際ＭＲＡ日本協会第７期会計報告

自：56年４月１日
至：57年３月31日

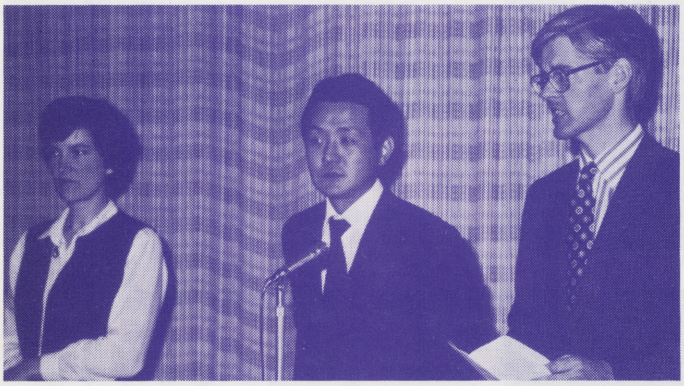
収入の部		支出の部	
前年度繰越	1,805,014	行動費	6,990,710
会費	6,620,000	国際会議	3,980,310
寄付	2,888,329	通信費	1,344,767
ＭＲＡハウス	5,796,234	印刷費	1,938,900
国際会議	3,175,839	図書購入	496,870
集会費	341,565	集会費	316,717
図書売上	237,170	家賃	2,000,000
保証金返還	541,550	事務所費	2,138,487
利子	34,553	仮払	558,283
仮払入	411,560	厚生費	129,900
雑収入	27,336	次年度繰越	1,984,206
計	21,879,150	計	21,879,150

国際MRA日本協会今年の動き

1月 「開発のための話し合いパートII」(インド・パンチガーニ)に代表を派遣

東西そして南北からの代表が一堂に集い、健全な世界を築くための創造的変革について話し合い、体験を分ちあうインドMRA国際会議ダイアログ・オン・デベロップメント・パートIIに日本からも住友御夫妻をはじめ、昨年に引きつづき代表が参加した。

経済的・技術的開発の基盤としての心の開発そして人間の開発をいかになすべきかが、世界各国より参加した200人以上の人々によって話し合われた。その中の一人、ナイジェリアのアイザック・アマタさんは、私達の希う開発のための計画が創り出されるか、失敗してしまうかはすべて私達自身の人間性の開発にかかっていることを強調された。



4月 ジェフリー・クレイグ御夫妻(イギリス)を約2年間の滞在予定で招聘

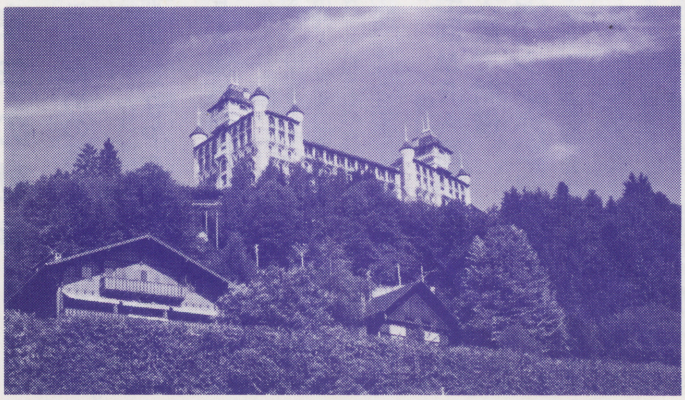
田端にMRAハウスが誕生して以来の希望であった、ハウスに外国人カップルをとの声に応えて、4月中旬イギリスよりジェフリー・クレイグ御夫妻が可愛い息子さんとともに来日された。

約2年の滞在予定で、日本におけるMRA活動強化の手伝いはもち論のこと、イギリスと日本を結ぶ民間外交官の一人として大いに活躍されている。ハウスで若い人々に英語を教える傍ら、自らも日本語学校で日本語の修得にはげまれている。息子さんもスクスクと育ち片言の日本語と英語を操っている。

先月は奥さんのご両親が来日され、久々に一家水いらずの生活を楽しまれた。

6月 第六回MRA国際会議を小田原及大阪にて開催。十ヶ国より31名の海外代表が参加

〝いまこそ道義と精神の開発を—すべての人、すべての国の新しい役割—〟をメインテーマに第六回MRA国際会議が小田原及び大阪にて開催された。国内からはもとより海外からも10ケ国31名の参加者を得て、小田原、大阪と各地で熱心な話し合いが展開された。4月に来日されたジェフリー・クレイグ御夫妻も、準備の段階より参加され日本での初仕事となった。会議以外でも日本的情緒溢れる東芝保養所での東芝労使の方々との交流、続いて関西では関経連や大阪青年会議所のメンバーとの交歓など多くの方々のご協力を得て相互理解の輪が広がった。



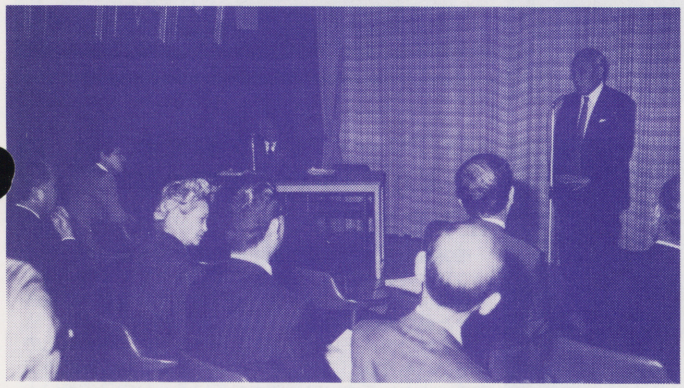
8月 MRA世界大会(スイス・コー)に日本代表を派遣

例年どうり7月よりスイスのコーで開催されたMRA国際会議に、今年も多数の代表が日本から参加した。世界経済調査会の木内信胤氏は〝近代工業は人間のよき性質を発展させるか〟というテーマで講演され、ヨーロッパ、アメリカ、その他世界各国からの代表に感銘を与えた。スイス駐在岡田日本大使も政治家会議に出席され、その積極的な発言で活躍された。又、今回で6回目のコーとなる東芝労使代表も土光哲夫氏を団長に参加をされ、講演にディスカッションに盛り沢山の日程を送られた。

関西ＭＲＡ秋季大会を開催　10月

澄み切った青空の下、10月２、３日にかけて神戸の住吉研修所に、今年も関西、九州方面を中心に各地より80人をこえる人々が、恒例の関西ＭＲＡ秋の大会に参加するため集まった。

今回も率直な意見の交換がなされ、関西の大会ならではの心の行きとどいた有意義な集まりとなった。若い人々の姿も数多く見られ、随所に若い力の台頭を感じさせた。



年次集会を憲政記念館にて開催

昭和57年度国際ＭＲＡ総会が、10月９日、憲政記念館会議室に於て開催された。(詳細は８ページ参照)

席上、定款の一部変更が以下のとうり可決された。

第３章第６条、会員になろうとする者は、入会申込書を会長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。
→会員になろうとする者は、入会申込書を会長に提出し、その承認を受けるものとする。

第４章第13条、「理事長は会務を統轄する」の後に下記文章を挿入する。必要に応じ理事長代行を置き理事長を補佐するものとする。

韓国ＭＲＡ青年会議代表派遣

教科書問題で日韓間が激動している最中、かねてより韓国ＭＲＡ代表鄭瑨氏が提唱されていた韓国ＭＲＡ青年会議が10月23、24日にソウルで開催され、日本からも３名が参加した。一行とともに会議に参加したジェフリー・クレイグ氏にその模様をレポートしていただいた。(11ページ参照)

来年の動き

1月　「開発のための話し合いパートⅢ」(インド・パンチガーニ)に代表を派遣。(７Ｐ参照)

4月　ＭＲＡ海外研修生が帰国

現在海外で活躍しているＭＲＡ海外研修生は兼松恵さん、田辺澄子さん、高橋千恵さん、星敦子さんの四人。来年の四月までには全員が帰国の予定です。それぞれが様々な場所で得た貴重な体験の数々をフルに生かしていただきたいと思います。

5月　第七回ＭＲＡ国際会議を小田原及大阪で開催
東京でシンポジュウム

第七回目の国際会議―小田原(5/27～5/29)の他、大阪キャンペーン(5/31～6/5)・東京キャンペーン(6/6～6/11)を次の予定テーマで開催する。
(テーマ)モラルの時代―融和の二十一世紀を築く
○第二の開国日本―ユニークさからユニバーサルに
○思いやりとわかちあいの世界家族
○連帯を築く国際チームワーク

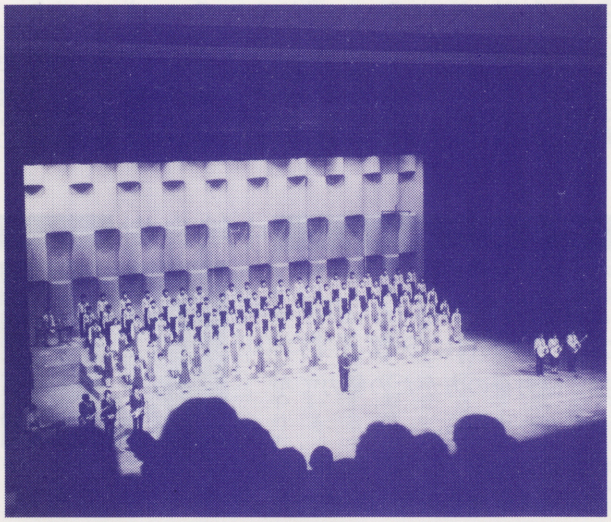
8月　スイスのＭＲＡ国際会議に日本から代表を派遣

9月　昭和五十八年度国際ＭＲＡ日本協会総会を開催
(場所・日時未定)

10月　関西ＭＲＡ秋期大会を開催

アジアの友，ソウルに集う……韓国MRA青年会議に参加して

ジェフリー・クレイグ（イギリス）



十月二十一日、私達四人が成田空港へ着くころには東京の空も徐々に白みはじめていました。そして昼には、私達は韓国で開催されるMRA青年会議に参加するために、ソウルへ向う飛行機の中でした。

中嶋良樹さん（造園技師）そして篠原晶子さん（児童学専攻の大学生）の二人にとっては、初めての海外旅行。長野清志さんと私（MRAフルタイム）にとっては再度のソウル訪問となりました。同じ日に、五人の若者達が台北から飛び立ち私達と現地で合流しました。

◇韓国のエネルギー

ソウルの中心地は三方山々に囲まれ、現在では市の中心から各郊外へはトンネルによって出ることが出来ます。八〇〇万を越す人口のソウル市では、現在数線の鉄道路線と地下鉄しかない為、交通機関は非常に混雑しています。殆どの人々は混み合った道路のわずかなスペースを走っているバスやタクシーを多く利用しています。しかし現在、オリンピックに間に合うように大規模な地下鉄網を建設中です。韓国は面積や人口（三九〇〇万）に於いては大きな国ではありませんが、急速にその名を世界に広めていますし、その生産や組み立てに於ける技術やエネルギーは世界経済に於ける彼らの名声を高めています。しかしながら韓国にとって、近隣諸国との関係も非常に重要であり、良い関係を作る為には不断の努力が必要とされています。歴史はこれ迄韓国にとって非常にきびしいものでした。しかし、私達はどこでも暖かい歓迎を受け、他のアジア諸国と理解を深め協力してゆきたいという願いを彼らから感じました。

急速な近代化にもかかわらず、彼らの文化や伝統はそこなわれてはおりません。滞在中に私達はソウルから南へ車で一時間程の所にある韓国民族村を訪ねました。大規模な村内には、韓国各地の典型的な家々が建てられていて工芸品作りや古い慣習が続けられ、訪問者に韓国の豊かな伝統文化を教えてくれます。そしてこれらの伝統は決して少数の人々の関心によるものだけではないのです。私達が学生に合う為にソウルの重要な大学の一校を訪ねた時、私達は数百名の学生達が民族衣裳をまとって、色々な踊りを踊っているとても活発なグループに会いました。彼らはとても熱心に見えました。

ソウルは東京よりほんの少しか北に位置していませんが、冬の寒さは非常に厳しいものです。滞在中のある日、私達はソウルの真冬を思わせるような寒さに出会いました。そんな時、オンドルのきいたレストランで韓国の常食の一つの熱い肉スープをすするのは、生きかえる心地がします。食事は私達が韓国の人々と話し合う大切な場の一つでした。朝食、昼食そして夕食の全てが話し合いや交友の場となりました。あるものは正式の会食でしたし、またあるものはリラックスしたものでした。その際、私達に常に同伴して通訳して下さった二人の韓国の学生の惜しみない努力に深く感謝しています。彼らの通訳が私達と韓国の人々との本当に有意義な友好を可能にしてくれました。

◇教科書問題

現在MRAのグループは七〇〇校以上の高校、そして九十九校ある大学の内の五十三校にあります。彼らの活動はソウルにあるMRAの事務所で調整されます。韓国MRAの理事長は元国会議員の鄭濬氏です。氏はフランク・ブックマン博士に出会ってのちに、国会議員を辞めて、韓国でMRAを育てるために働くことを決心されたのだそうです。一年中彼は各地のMRAグループに会うために韓国中を旅します。そして、それらのグループの教師や学生の為のMRAトレーニングコースを定期的に開いています。年に二回、MRAに組織された〝シングアウトコーリア〟の公演が行われます。二十三日の土曜日、私達は世宗文化会館公会堂で行われた公演

を見学しました。二回に渡る二時間の公演には各々四〇〇〇名の聴衆が来ました。〝シングアウトコーリア〟は韓国各地の高校生によるグループで、健全な国家を築き保つための愛国心、そして高い規律と献身が表現されました。私もバグ・パイプによる曲を披露することができました。韓国人はとても歌が上手ですが、ある人によるとこれは韓国人がイタリア人のように半島に住む民族だからだということでした。

当然最近問題になっている日本の教科書問題も話題になりました。長野さんが、前回六月に訪韓した時に会った大学生の韓君とその問題について話した時、彼は「私のクラスメートの何人かは、このことについて非常におこっています。でも、私は六月にあなたに会った時の話しや、大部分の日本人は報道されているような人々でないという私の信頼を彼らに伝えることが出来ました」。これを聞いて私は、互いに理解したいと望んでいる人々の個々のふれあいがどれ程大切かということを深く感じたのです。

韓国MRA国際会議に参加して　中嶋良樹

10月24日、韓国MRA青年会議が開かれた。日本からは長野清志氏、篠原晶子さん、ジェフリー・クレイグ氏、私の4名、中華民国からも5名の代表が加わった。現在、韓国には200校の高校にシング・アウトがあり、MRAのクラブが高校に750校、中学に200校、小学校に1校ある。鄭濬先生をはじめとする本部、協力会の方がたの努力で年二回のシングアウトの公演、青年会議、その他の活動がなされている。

シングアウトコーリアの公演は10月23日、世宗文化会館公会堂で一回に4000名を集めて2回行なわれ、小学生のシングアウト、ジェフリー・クレイグ氏のバグ・パイプ演奏も加わり盛会だった。

その他、韓国MRA協力会々長、金仁得氏との会食、民族村の見学、中央大学での学生との集会、仁川大学学長、学生会との会食など有意義な時間が続いた。

青年会議では、鄭濬先生が「過去にくらべて知識、科学は発達したが道徳は低くなっている。この時代をのりこえて道徳的な時代をつくろう」。長野清志さんは「過去に日本は韓国に迷惑をかけた。これからはそういうことのないよう、若い人と協力していきたい。日本が謙虚で思いやりのある国になれるよう力をかしていただきたい」。ジェフリー・クレイグさんは「水が不足していたインドの村で、1人が変わることによって村が救われた」。篠原晶子さんは「日本に帰って韓国の人々の暖かい心を伝えたい」。とそれぞれ述べた。

今回の会議を通じて私は韓国、中華民国など新しい友人ができたことを嬉しく思っている。今後もこの交流の輪を広げアジアの平和のために努力しなければならないと感じた。

◇官僚主義

官僚主義に対して、はっきりとした答えをうち出せる社会制度が仮にあるとしてもこの本にはあまり関心がない。ふさわしい構造的対症療法があるにはあるであろうが。

しかしながらアメリカとソ連ぐらいに違った制度をもちながら同じ悩みに不平をこぼすということは、構造的な欠陥は問題の全てではないということを示している。ノルウェーのある元首相が、官僚主義は人に対する官僚の態度にも依ると指摘している。

官僚制の影響と重要性は増長し続けそうである。複雑な現代生活は、専門家軍団の増大を必要とする。大多数を占める一般の人には技術的・経済的データといった複雑な迷路に入り込む機会は得られない。ただ専門家にまかせて、最善を望むことしかない。これが両者の間の隔離の大きな源となる。と同時に専門家は権力を所有する人々に自ら権力をもたらすようになってしまった。

「現代においては、アメリカの大統領はいわば自らの官僚機構の捕虜であり、議会は自らの委員会の捕虜である。」、かつてアメリカ政府の主要ポストを務めたことのあるカリフォルニア大学のニスカネン教授は述べている。

ある幻滅したドイツのマルクス主義者は、「東ヨーロッパでは黒字を実際に食いつぶしているのは官僚だ。」と論評してい

る。

イギリスの国際社会主義者クリス・ハーグマンは「東ヨーロッパで官僚に代わって全般の決定を下す内部権力グループは資本主義の会社の重役会のようなものだ。もっとも、このグループは単に経済的決定ばかりでなく、警察、法の遂行、軍事力の使用についてまで支配をするという点では違っているが。」と述べている。

あるイギリスの議員は、政策決定や行政はほんの一部を残してほとんど大臣のところまで届かないことに不平をこぼす。「七十万人の官僚と七十人の大臣では、そうならざるを得ない。」と彼は結んでいる。

こうした官僚の力に対する評価が正しいか否かは別にして、人々に選挙で選ばれた代表の手に最終的な支配をゆだねることもまた現実の問題である。一体誰が決定を下しているのかますますわかりづらくなっていると、ノルウェーのある大臣が言っている。

とはいえ、官僚主義は官僚だけの責任だけではない。カリフォルニア大学院公共政策学部長は次のように書いている。「国民が政府のできないことを要求するために、政府は解決不可能な問題をますます不当にかかえることになる」。コロラドの上院議員ハートはもっと簡潔に述べている。「政府のポケットから自分の手を取り出さない限り、政府からのがれることはできない」。

官僚の権力と対抗する方法もある。選挙で選ばれた代表は、自分の思うままに独自のふさわしい専門家を使うこともできる。権力を分散し、意志決定をその決定によって影響を受ける人々により近いようにすることもできる。政策形成の道程も最初からより透明で、計画やプロジェクトが大衆の目にさらされるようにすることもできる。

省庁間に競争をさせて、経済性と能率性に応じて報償金を与えたらどうかと提案するアメリカのエコノミストがいる。いかにもアメリカらしいやり方ではある。納税者が自分で税金を収める省庁が選ぶことができれば省庁は納税者の目から見てもっと能率的になるであろう、と考えるイギリスの友人もいる。こうした提案が現実的かどうかは別にして、硬直してまるで耳を傾けない官僚機構と勝ち目のないいくさをしてきた人からは共感を得るであろう。

産業における労働者による支配と自主管理こそが、官僚主義への答えとみるのがトロッキー的強硬派の意見である。東ヨーロッパにおける官僚主義はこの考えに対する指導者の裏切りの結果とみなされる。アーネスト・マンデールは次のように述べている。「ソ連の歴史的悲劇は共産党の指導者の多数が、重大な局面において官僚主義の現象を認識しなかったことだ。もしボルシェビキ党が二十年代の初めに問題に早く気づいて党内のグループの形成を許し、産業におけるある種の労働者の支配が同時に導入されていたならば、官僚主義に対する抵抗はもっと強くなっていたであろう」。彼のつけ加えることには、たとえこうした改良があっても「より急速な産業化と自主的かつ集団的な農業、そして中国およびドイツにおける国際革命の勝利の達成」と機を一にしなければ官僚の勝利を防ぐことはできなかったとしている。

これらの〝もし〟は、やがて官僚主義にうち克つこともあるのではないかという希望的観測をうみ出すことができる。労働者の支配が果たしてそれを達成してくれるだろうか。アーネスト・マンデールはユーゴスラビヤの例を引きあいに出している。それによると民主的に選ばれた労働評議会（Arbeiterrate）は、工場にとどまる大多数（七十五％）の賃金を上げるために、労働者の二十五％を解顧するよう提案した。「階級としてのプロレターアートの共通利益は、必ずしも労働者の個々のグループの共通利益とは一致しない」とマンデールはコメントしている。

利己的な動機にある程度の構造的なセーフガードが加えられたにしても、果たしてそれが効果的であるかが問題である。

「官僚は私有財産のように国家の本質を所有する」とマルクスは述べ、官僚が人間性に対して抱くうわべだけの関心は自らの物質的利益の隠蔽だときめつけている。しかし彼の療法は失敗した。マルクス主義を認ずる国々においては雑草がはびこっている。

ヒットラーはこの問題を意識していた。「わが闘争」の中で彼は次のように述べている。

「運動が上から下へと機械的に組織されると、ふさわしくない人がポストについた場合、彼はねたみから能力のある人々が伸びるのを妨げようとするようになる大きな危険がある。こうした場合に生じるダメージは若い運動にとっては致命的である」。しかし、意識だけでは充分でなかった。彼が築いた組織は全く官僚的であったからである。

中国は官僚主義根絶のため最も抜本的な努力を試みた。自己の利益のためではなく国のために任えるように人々に働きかけ、基本的な態度を何とかしようと一生懸命やった。しかし毛沢東の死後明らかになったように、こうした為されたことは前進と言うよりも、むしろ混乱をもたらした。

ある観察者によると、キューバの指導者たちは官僚主義的傾向を原因不明の不思議な悩みとみなしているようである。いかに完成されたシステムであろうと、権力や支配に対する人の本能的動きに対処できるシステムがない、ということがここでいう不思議さであるかもしれない。

◇新しい出発の意志

権力や地位や特権を手に入れると人に何かが起きる。権力を得るやいなや、権力から引きずりおろされると言う恐れがあらわれ、その恐れがあらわれるや否や何でも自分の支配におきたいという欲望があらわれる。

地方分権をすることは支配を失うことにつながり、結局抵抗を受けてしまう。同僚も競争者とみなされるようになり、同ぜぬ者は神の後光に対する脅威となる。

動かしがたい体制や化石化した機構は、利己的な動機の果実の一部でもある。自分自身のために頂上に到達したいならば、そこまでたどりつき、それで到着したことになる。まさに自分の立場が確立されたことになる。そこまでいくと権力の頂点の自分の立場、或いはそれほどまではいかなくともぜいたくな暮らしをする立場にとっても、変革というものが脅威と化してしまう。

仕えるために、改良するために、或いは何かを変革するために権力を求めるというのは別のことである。そのような動機は、自分が正しいと信じたもののためには自分の地位をもかける覚悟ができる、という点で一つの実りがある。それはまた官僚主義の根の一つである画一主義に立ち向かうことにもなる。

自分が正しいと信ずることよりも、まわりから期待されていると思うことを考えたり行ったりするとき自分は同調したことになる。恐れ、野心、そして誰かに気に入られたいといった気持がその最も一般の理由である。こうした道程において自分は自由を売り渡してしまう。「しかし自由を排除したくない人がいるだろうか？」とアールフス大学のスローク教授は問う。「とりわけ自由を喜んで買おうとする人がいる時に。独自の道を歩む不安定さよりも集団の中の安定さである。やがてはおまけに権威主義的で弾圧的な面をも喜んで受け入れてしまう」。

私が話したスウェーデンの経営者は、多くの会社で画一主義がもたらしている代償に怒りをあらわしていた。部下達は上役にうらまれそうな、そして自分達の昇進を不利にするような異端な考えは差し控えてしまっている。対立する見方の間のやりとりによるところの創造性は失われてしまった。権力はますます集中し独裁的な傾向が強まっていた。

問題は上層部に限られているだけではない。ゴーテンブルグの新聞にスウェーデンの労働者が次のように問いかけている。「大多数が自分の側についていると感じる時ですら、個々人が主張しようとしないのは一体誰のせいだ？　羊の群れのように少数の生意気な連中に身を委ねている。こんな民主主義があるのか？」。

この代償はバランスと是正力の欠如である。たった一人の正直な確信でも再考を促すことができるのに、ときにグループが間違った方向に突っ走る。

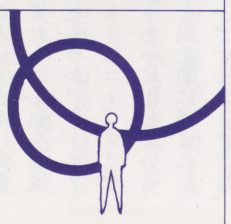
ソ連の教育も此の問題ととりくんでいる。教育家ヴァッシリ・スコムリンスキーは次のように述べている。「自分自身の確信から重大な決断をしたことのない人は（共産主義の）、意識の創造者にはなれない。こういう人はせいぜい他人の意志を律義に遂行する人にすぎない。共産主義者とは他人の意見に左右される人ではなく、自己の良心に導かれる人である」。この洞察がソ連の教育の真の目的を代表するかどうかは別問題である。反体制者に対する苛酷な扱いをみると、実際そうではないことを示している。

政党が反官僚主義をますます綱領の一部にとり入れようとしているのは、国民に深く根ざした感情に応じようとしていることには間違いない。既に述べてきた構造的対処がこれから適用されるであろう。しかし官僚自身の精神や態度が依然として決定的要素であり続けるであろう。社会学者マーティン・アルブロウは次のように述べる。「それ自体適用されるルールはない。ルールはその意味を解釈しかつ経験的状況からその適用が正しいかを評償するという、両方の任務を果たせる人によって適用される。言いかえれば人は思慮分別によって行動しなければならず、全てのルールは比の思慮分別が実践される精神にかかっている」。

毛沢東は永久革命は日和見的態度と化石化した権力構造への答えだと指摘している。しかし永久革命は人間性には向いていない。我々は安定、快適さ、平和を好んでしまうからだ。新しい出発をいとわぬ意志は人の心の奥で生まれなければならない。

（続く）

Jens-J.Wilhelmsen
Man and structures



改訂版（英語）
Man and Structures
（人と機構）
発売中
定価 800円

あの時、この人——旅のスケッチ

私が体験した三年間の海外生活

その二……インドからスイスへ

市原登志子

◇インドからの最後のメッセージ

ついこの間までインドの習慣や民族の違いに悩み、日本恋しさのあまり自分のからに閉じこもる日々を送っていた私でしたが、気がついてみると、もうすでにインドを発つ時が迫っていたのでした。

出発を目前にしたある日、インド最後の想い出として、念願だったタジマハールを見に一人アグラを訪ねました。私の期待していたのは輝くばかりに美しい大理石で造られた荘厳なタジマハールを見ることでした。しかし、実際のタジマハールはそのようなものではありませんでした。それは全く、インドのイスラム教徒たちの汗と涙のシンボルであり、たいへん生々しい彼らの生活の一部を見る思いでした。それは私達外からくる者達に観賞されるためにそこにあるのではなく、インド人たちの心の拠所としてそこにあったのでした。

インドでの六ケ月間、何処へ行ってもインド人たちの好奇のまなざしが、外国人である私につきまとったものです。ここタジマハールでも、私は彼らのまるで刺すような鋭い視線の中に立っていました。ふり注ぐ視線の中で数多くの思い出が脳裡にうかんできました。

食い入るような、そして何かを求めるような何百何千のその目は、今思えば、私に対してのそして日本人という私のアイデンティティーに対する問いかけだったのかも知れません。くり返し、くり返し私に多くの人たちの姿がうかび上ってきます。

「どうして日本人ってそんな顔しているの」。「君は本当に典型的な日本人なんだね」。「今、君は日本がどう変っていかなければいけないと思う？　日本のどういう所を変えなければいけないと思う？」。「今われわれは日本を必要としている。日本の力が必要なんだ」。「インドと日本は、アジアの中でも数少ない民主主義国家なのだから、一緒にやっていかなければならないでしょう」。

それぞれの言葉のはしはしからにじみ出る日本への期待に、私の日本人として背負ってしまった責任の重さのようなものを感じたものです。

ヨーロッパへの期待を胸にボンベイ飛行場を飛び立とうとしていた私の目に映ったインド最後の光景は、滑走路の側に並んだスラムの家々でした。インドに別れを告げようとしている私に向って何か悲痛な叫びを上げているかの様でした。忘れることの出来ないインドからのメッセージでした。私はいつのまにかあふれた涙をほほに感じていました。

◇思いやり

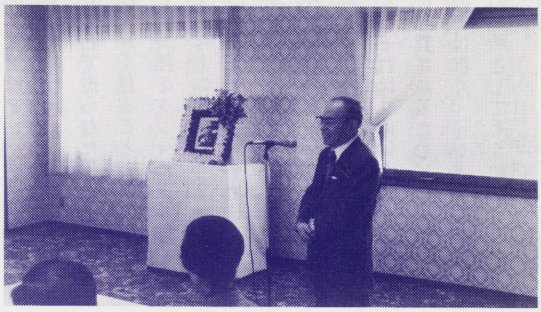
ヨーロッパで最初に訪れたのはスイスでした。レマン湖を眼下に望むコーという小さな村で、毎夏開催されるMRA国際会議の会場となっているマウンテンハウスがその夏の私の滞在地でした。すばらしい大自然に囲まれた最高の環境の中で世界各国の人々が集り、会議に参加します。ここでは大会参加者すべてが、料理、サービング、ハウスキーピングなどの各チームに参加し、参加者自身が大会を運営していくというユニークな方法をとっていました。ある時、私はハウスキーピングの係でした。各部屋をまわり、掃除、片付け、ベッドメーキングをしたり花を生けたりします。私は若い女の子たちの部屋をいくつかまかされました。あまりにちらかった部屋は片付ける気にもなれず、面倒になってそのままにしてきたこともありました。そんな時、同じチームの先輩から言われたことがあります。「部屋が特にちらかったりしている時は、その部屋の人はもしかしたらあまりハッピーじゃないかも知れないわね。何か悩んでいることがあったり、疲れてしまっているのかも知れない。置き手紙でもして一言勇気づけてあげることもいいかも知れないわね」。それまで事務的に部屋を見てまわり、早く仕事を終わらせることばかり考えていた私は〝ビシッ〟と頬を打たれた思いでこの言葉を受けとめました。与えられて仕事をするということは、単にその仕事を片付けることではなく、自分の誠心誠意をもって心を尽くし仕えることだということを教えられました。そして大切なことは、その相手のためを思い、その人のために自分のベストを尽くすことだということです。ここマウンテンハウスを訪れる人々の多くが心を動かされ、心を洗われたような経験をなぜするのかわかったような思いがしました。その秘訣はハウスを運営している一人一人の心の中にあったのでした。各自が、正直、純潔、無私、愛の四つの絶対標準に照らして、静かに心の声に耳をかたむけ、そして得た考えを勇気を持って実行してゆきます。こうして多くの犠牲と祈りに支えられたマウンテンハウスは、世界中の誰にでも大きく手を広げて歓迎しているのです。

（続く）

鉄道を枕に討死を

■十河さんを偲ぶ会開かる

上越新幹線開通を前に新幹線の是非や歴史について何かと話題の多かりし去る11月3日（文化の日）、その「生みの親」十河さんを偲ぶ会が開催された。浜離宮を見降ろし、房総半島をもかすめる芝・弥生会館には、十河さんの抱いた国鉄や世界に対する遺志を継いでいこうとする約40名の人々が集まった。



「西のブックマン・東の十河」

〝十河ファミリー〟は巾の広い人の輪が特徴。大和与一（元参院議員）・小柳勇（参院議員）の二人の元国労委員長が故人とのあたたかい人間的交わりを披露した。大和さんはお宅で浴衣姿のままで国鉄ばかりか国や世界の行く末を時間を忘れて論じでおられた十河さんの情熱と先見性を紹介した。小柳さんはMRAの会議で「列車を停める総裁」と紹介されて十河さんの隣りに座ったこともあると前置きしたあと、コミュニケーションをよくするため週に一度二人で昼飯を共にしそれを目白三平さんが筆記していた、と語った。元国鉄常務理事の尾関雅則さんは、「鉄道を枕に討死にする。」と豪語していた総裁が〝夢を与えるため〟と仙山線の開通に駆けつけた思い出を語れば、「経済が強くなるにつれて夢を失った」現代こそそうした大きな夢が大事だとする加藤シヅエ元参院議員は「西のフランク・ブックマン、東の十河信二」の偉業を称えていた。

MRA劇「タイガー」に出演した学生の帰朝報告に深く感激したことが十河さんがMRA精神を国鉄に活かそうとしたきっかけであると語るのが当時の石川島播磨労組委員長柳沢錬造さん。柳沢さんと共に労働者によるMRAの劇に参加した根本福衛、竹内直治、田村登さんも駆けつけた。発起人で司会役を務めた元国労婦人部長榊たか子さんは十河さんの額をコツンとたたいたことのある唯一（？）の人。

〝開かれた総裁室〟を信じた十河さんも実は取り巻きが知らず知らずのうちに〝鉄のカーテン〟を築いていたことを榊さんに指摘され、「孫にぶたれたようでうれしい。」と持前の頑固さを返上して素直に謝ったとのこと。

初志貫徹の精神に生きる

こうした十河さんの人柄を初志貫徹の精神・起伏の激しい感激性・信念に対する頑固さの三つに分析するのはカネボウキャドバリー社長の中島秀夫さん。元々国鉄とMRAとのつながりとなったのがこの人の〝キセル〟。ただ乗り分のお金を返済に行ったらビックリ驚天したのが国鉄側。とうとう当時の加賀山総裁のお宅にまで呼ばれてチェンジの体験を語ることになったという次第。

「十河さんが総裁になったのは昭和三十年。洞爺丸事件の後で誰も引き受け手のない難しい時期だった。」と語るのは当時新入社員としてMRA劇「ホフヌング」を見にいった永井和夫さん。その後十河さんは新幹線と本格的に取り組むことになる。成否の可能性が技術的には五分五分といわれたが、それを決断にまで導いた〝ひらめき〟はマキノ島（MRA国際会議場・アメリカ）で得られた。単に産業の動脈を作るのではなく、敗戦から立ち上がる日本人一人一人に〝夢〟を与えよう、という精神が技術を越えた。その後も難問が次々と立ちはだかった。国は新幹線への資金援助を渋り、結局国鉄は世界銀行からの融資で建設をすすめる。国鉄による新線の建設はこれきり、と十河総裁と小柳委員長との間で合意するが、この頃から政治からの圧力が一層強くなる。そしてとうとう十河さんは新幹線開業を前に退陣を余儀なくされる。

その後国鉄の赤字はうなぎのぼり。十河総裁在任中だけが国鉄唯一の黒字時代である。東京駅新幹線ホームのはずれにある十河さんの陶像を今も多くの外国人が訪れる。日本の奇跡をもたらした偉人の信仰と夢とに心が魅かれるからであろうか。その志を一人一人が継いでいきたいと、国鉄MRAグループの一人鬼頭誠さんは誓った。

九十七才で昨年他界した後、昭和三十四年に書かれた遺書が発見された。加賀山由子さんと共に遺族代表で出席された十河和平さんはその中から次のように引用した。「誰が言っているのかではなく、言っていることが正しいかどうかで判断せねばならない。」

●挨拶する大和与一さん